健康長寿延伸へフォーラム ホスピタルデザイン研

ホスピタルデザイン研究会（会長・戸倉巻子ドムスデザイン代表）は3月27日、京王プラザホテル新宿で日本未来健康フォーラムを開き、医療・福祉・不動産関連業者を中心に約120人が参加した。

テーマは「幸せな老後をデザインする！ヘルスケア産業の最前線」。同会は、人が生まれてから最期を迎えるまでの、病院（施設）を中心とした地域デザインを提案・実現することを目的に設立した。

あいさつの中で、戸倉会長＝写真＝は「病院で看護師をしていた30年ほど前、病棟は床がグレー、壁と天井は白で統一され『白い巨塔』だった。それで『緑を入れること』『落書きができるようにすること』を提案したが却下された」と振り返り、自ら患者が元気になる病院を建てようと建築家に転身したことを紹介。現在ではデザイン的に優れた病棟が多くなっていることにも触れながら「それだけでは通用しなくなってきた。病院・福祉事業者・住宅業者が連携しながら質を高めていくことが大事になってくるのと同時に、地域包括ケアも縦割り行政の中ではうまくいかないと思いこの会を立ち上げた」と語った。

講演会では、経済産業省ヘルスケア産業課長の江崎禎英氏と医療法人財団の慶成会会長・大塚宣夫氏が講師を担当。江崎氏は「国民の健康寿命の延伸」と「新産業の創出」を同時に達成しながら予防・健康管理へのシフトチェンジを求めた。大塚氏は「自分で生き切る覚悟を持った人でないといい人生はやってこない」と呼びかけ、核家族化と高齢化で老後を家族に頼ることができなくなることを指摘した。

懇談会には、鈴木静雄副会長（リブラン会長）が登壇。経済産業省、日本医師会、全国商工会議所が一体となり健康寿命延伸に取り組んでいることを報告し、あらゆる産業が健康経営に関わることを望みながら「従業員・家族・取引先の健康増進を」と促した。